

## 〔8〕 肉体は精神そのもの

### ジリ・キリアン振付『スタンピング・グラウンド』

1990年8月17日 東京新聞 夕刊

#### ● 束縛された動作

こんな格好だけはできない、と思うことがある。ファッションの話ではない。生身のわれとわが肢体のことである。

どうしてできないのか。いわく、地位も名誉もある社会人のプライドがゆるさない。男として、あるいは女として、恥ずかしくてできることではない。だいいち立派なおとなのする格好ではない。それではまるで体が不自由みたいではないか。人間じゃないみたいだ、鳥や獣じゃあるまいし……。

というわけで、人は日常、自分の肉体にとって可能な形や動きのなかで、ごくごく限られたものだけを選び取って生きている。そしてその選択の背景には、人が自分自身に与えた定義、その社会的立場や人生観、美意識などが陰画として、くつきりと浮かびあがっているのである。背後からの規定が多ければ、受ける束縛もまた多い。「頭のいい人は体が固い」という俗説があって、この場合の「頭の良さ」はおおいに問題だとしても、理由のないことではないのかもしれない。体の固さ即ち精神の重圧だということとは、本気で肉体訓練をしてみれば、すぐに分かることである。

舞踊家といわれるほどの人ならば、どんな動きでも自在にこなせるかという点、実際は逆である。というのも、これほど限定されたパターンで動いている人はいないからだ。規範の激しい古典舞踊の場合、その種類を問わず、手や足の動きから目のつけどころにいたるまで、あたかも幾何学の図形のように正確に定められている。自由を標榜する現代舞踊や創

## 〔8〕 肉体は精神そのもの

### ジリ・キリアン振付『スタンピング・グラウンド』

1990年8月17日 東京新聞 夕刊

作舞踊も、それぞれが自らの舞踊宇宙に打ち込んで  
いる自己規制の楔は、それこそ星の数ほどにも多く、  
その組み合わせが独自の星座を描くのである。

#### ● 自己創造は痛みをとまなう

そうした規制は舞踊家の日常の動きにまで影響を  
及ぼさずにはいない。たとえば日本舞踊家は思い切  
り両腕を伸ばしてバンザイをするということがほと  
んどない。それによって内向的に調和のとれた完璧  
な美意識がぶざまに裂けるような気がするのだ。バ  
レリーナはまた、足を内輪に置くことがどうにもで  
きない。両足を百八十度の一直線に開くことを基本  
の第一として鍛えられた足は、内輪にして腰を曲げ  
ると、もうそれだけで痛いのだが、しかし本当に痛  
いのは体ではない。心である。そのような格好をし  
ている自分自身が許せなくて、屈辱感、いや自己崩  
壊の感覚に苦しむのだ。体は心なのである。

しかし、いかに調和のとれた完璧な美を体現して  
いるからといって、自分自身の可能性をそれだけに  
限定して生きることに、人はいつまでも満足できる  
ものだろうか。その美が到達しがたい目標として遙  
か彼方にあるうちは、それへ一步でも近づくことが  
すなわち自らの進歩の証し、変化の証しである。だ  
が目標は近づけばまたその先に新たな地平を開く。  
かくして、規範を極めようとする精神は、常にそ  
れを乗り越えるエネルギーを内包するものでもある。  
それにしても、そのような新しい地平は、いったい  
どのようなにして開けるのだろうか。

美を目指しての自己実現には痛みが不可欠だが、

## 〔8〕 肉体は精神そのもの

### ジリ・キリアン振付『スタンピング・グラウンド』

1990年8月17日 東京新聞 夕刊

それを越えての自己喪失、そして新たなる自己創造もまた痛みと恐れなしには済まされない。体の痛みよりもなお心の痛みが。そのような痛みこそが、もしかすると最も大きな感動を呼ぶのではあるまいか。たとえば文学において、すぐれて創造的な作家たちがそうであったように、舞踊においてもまた。

#### ● だが恍惚たる痛み

この六月ネザーランド・ダンス・シアターが初来日した時、ジリ・キリアン振付の「スタンピング・グラウンド」を見ながら私が考えていたのは、おおよそ以上のようなことだった。

背景の黒い幕をかきわけて一人、また一人と現れる踊り手は、人間の肉体いやむしろ精神にとつて可能であるその極限の形と動きとに迫ろうとしているように見えた。限界と思われる重心をもっと低くする。あるいは、これが精一杯という腕をもう一段、伸ばしてみる。たわめた背中や肩をもっと丸めてみる。すると肉体は、思いもかけぬ柔らかさや剛さ、そして粘りを見せ、信じがたいプロポーションとなつて、まるで翼を広げた鳥か、あるいは大地にはりついて疾駆する獣のようになつたりもするのだけけれども、しかし鳥や獣の模倣をしているわけではない。あくまで人間以外のなものでもないのだ。が、それでいて、これまで単純にそうと思つていたものとは違う人間の体、美しさと思われていたものとは異なる美しさ、なのである。

それはもちろんクラシック・バレエのメソッドや美意識を遥かに越えるものだし、なべてのモダン・

## 〔8〕 肉体は精神そのもの

### ジリ・キリアン振付『スタンピング・グラウンド』

1990年8月17日 東京新聞 夕刊

ダンスのテクニクで收拾のつく形や動きでもない。さりとして、それらとまったく無縁に考え出され、演じられているわけでもなくて、言ってみればクラシック・バレエやモダン・ダンスを手中に収め、その精神をも技術をも踏まえた上での、その先の試みとして出てきたものなのである。音楽の「打楽器のためのトッカータ」（カルロス・チャールズ）が私の耳には、そうした創造的精神にみなぎる「冷静な狂おしさ」「恍惚たる痛み」の鼓動そのもののように響いたことであった。

キリアンがこの舞踊の発想を得たのは、オーストラリア北部の原住民アボリジニーの儀式に参加してのことであったという。キリアン自身の言によれば「この作品を創り出したのは、ある種の動きの背後にある精神——原住民が表現し、体现するところの、肉体に宿る精神による」。だがもう一つ見逃すことができないのは、その精神を、キリアンというヨーロッパの優れた舞踊的精神が、その背後にある伝統・技術の総力を挙げて受け止めたということだ。ふたつの異質の精神性の出会い、その衝撃的な融合がこの舞踊作品を生んだと言えるだろう。舞踊において、まことに肉体は精神そのものなのである。